

子ども用交流ホームページ「子どもの広場」での実践

- 教室から全国へ！ 御陵の玉ねぎをPRしよう -

神奈川県横浜市立飯田北小学校
5年担任 横山 美明
yoshiaki@ab.wakwak.com

福井県吉田郡松岡町御陵小学校
6年担任 竹林 保博
yasu-t@mitene.or.jp

キーワード **子どもの広場, 学校間交流, 総合学習, 小学校, 電子掲示板, インターネット, 玉ねぎ**

1. はじめに 「子どもの広場」概要

平成11年度の同事業（Eスクエア・プロジェクト・協働実践企画）において、4校の実験参加校間で、子どもたちの交流に主眼を置いたウェブ「子どもの広場」のシステムのあり方、インターネットの学習活動への活用の模索を行った。この検証により、ウェブデザイン（インターフェース）の検討をある程度行うことができ、ウェブ上の電子会議室の数、活動テーマ、子どもたちのメールのやり取りに関する教師の援助の仕方、スタッフのモデレーターの仕方についてたくさんの示唆を得ることができた。

今年度は、「子どもの広場」の最終目標である全国の学校を参加対象とするための仕組み作りと位置づけ、参加交流校を昨年度の4校から十数校に増やし、さらなるインターフェースの改良・変更、より多くの学校が参加した場合のシステムの負荷、会議室運営にかかわるノウハウの蓄積・改善を行い、子どもたちが情報収集のみにおわらない双方向性のある「子どもの広場」をウェブ上に展開することにより、総合的な学習に代表される学習場面への場を提供するための仕組み作りを行った。

実践授業については、本プロジェクトでは、参加校間のネットワーク上での交流を通して、子どもたちや教師から、自主的に具体的な活動案や実践テーマが上がってくることを目標としている。この「子どもの広場」を活用した実践例を次に福井県御陵小学校の活動から紹介する。

2. 御陵小学校実践レポート 「子どもの広場」での取り組み

(1) はじめの段階

本校は、全校児童140名、各学年1クラスの小さな学校である。転出、転入も少なく、私の担任する6年生はほとんど保育園から同じメンバーで生活しており、子どもたちが他の学校との交流する機会は、連合体育大会や音楽会、修学旅行と限られていた。

当初この「子どもの広場」には、6年生全員（26名）でも考えたが、将来活動を発展させるために、スキル・内容の両面でよく知っている子がいてアドバイスができるといいこと、現在の環境（インターネットに接続できるコンピュータが図書室に5台、6年生の教室に1台設置されている）では時間的にも難しいこと、1月に新コンピュータルーム（2人に1台）が完成することを考えて、とりあえず4人の子ではじめることにした。とても行動力のあるY君、家でもよくPCに触れているS君、ゲームに大変詳しいT君、K君である。4人には、グランドオープン前からIDを発行し、私と5人で書き込みや返事のやり取りを練習したり、返事がもらえるような書き方や、書き込む際のモラルについて話し合った。

(2) いよいよ子どもの広場グランドオープン 4人の子どもたちは

待ちに待った「子どもの広場」のグランドオープンの日、メンバーはさっそく書き込みをはじめた。特に「であいゾーン」の「自己紹介」や「ゲーム」のコーナーへの書き込みは早かった。私としては、なるべく早く「まなびゾーン」の方へ関心を向けたかったのだが、まずは一人ひとりの様子を見てからと思い、何も言わないことにした。

行動力のあるY君は、私の「書き込みの最後に返事がもらえるようなコメントをつけるといいよ。」というアドバイスに「君はどうなの?」「もし教えてほしかったらまた返事をしてね。」締めくくるなど、とても初めてこのような電子掲示板に参加したとは思えないような書き込みぶりだった。

家でもよくPCに触れているS君は、毎朝教室のPCを起動し4人全員への書き込みのチェックをするという、思ってもみない行動をとった。これにより、私が「君、返事が来ているよ。」と言わなくてもいいようになった。

どちらかという人とのコミュニケーションが苦手なT君、K君も予想以上に興味をもって参加し始めた。私が期待していた「まなびゾーン」の「ふるさと自慢」の部屋への書き込みを最初にしたのはT君であった。彼は、自分が調べたことをすぐに「報告」というタイトルで書き込んだ。反応もすぐあり、自信を持って参加するようになった。

彼は、自分の書き込みが注目されるようクイズ形式のものを考えたりと、書き込みに工夫が見られた。T君よりもっとコミュニケーションが苦手なK君が、S君やY君に操作の方法や内容を考えてもらいながら、積極的に書き込んでいるのにはびっくりした。教室のPCが全国の友達との交流窓口に変身しつつあった。

(3) ふるさと御陵の自慢の1品 ふるさと自慢への書き込み開始!

玉ねぎといえば、料理には欠かせないもので、臭いがきつく切ると涙が出るなど大きな特徴がある。産地としては北海道や兵庫県(特に淡路島)が有名で、御陵の玉ねぎは地元の人しか知らない。

子どもたちは玉ねぎの特徴から、御陵の玉ねぎの歴史や生産の様子へと調べ学習を進めていった。調べていくうちに、御陵の玉ねぎのほとんどが淡路島の加工工場へ出荷されていること、他の産地と比べてとても大きく甘いことから、給食でよく使われるということがわかってきた。子どもたちの心の中に、玉ねぎが自分たちの自慢の一品という思いが膨らんできていた。

この思いを4人のメンバーが「ふるさと自慢」への書き込みで表現し始めた。「であいゾーン」の自由な雰囲気と違って、どう書き込んだらいいのか不安そうだったので、「調べてみんなに知らせたいと思うことを書き込んでみたら?」とアドバイスをした。最初に書き込んだのはT君。県立大学に行って、生物資源学科の教授から玉ねぎの成分や栄養について教えてもらっていた彼は、「報告」というタイトルでわかったことをその日のうちに書き込んだ。すぐに神奈川県元街小のK君から返事をもらい、大変喜んでいて。続けてK君が近くのレストランで教えてもらったことを「玉ねぎの料理」というタイトルで書き込んだ。これにもすぐに千葉県芝浦柏中のWさんから反応があり、ここでも交流が始まろうとしていた。御陵の玉ねぎの歴史や生産の様子を地元のJAに行って調べたY君は、「御陵の玉ねぎ」というタイトルで書き込みをはじめた。質問や感想を募集したり、「これからどんどん紹介するね。」という締めくくりは、これからの書き込みを期待してのものだった。しかし、その後1週間、何も書き込みがなくなり、それぞれのやりとりは終わりかけた。

ここで変化をつけたのがT君だった。彼は、別のコーナー「歴史なぞなぞ」でクイズが頻繁に出されているのを知り、自分たちも書き込みに注目してもらおうと、玉ねぎのことをクイズにして書き込みをはじめたのだった。他のメンバーもそれを見て自分たちが調べたことをクイズにして書き込んだ。残念ながらクイズへの反応はなかったが、何とか玉ねぎをPRしようと考えているのがうかがえた。そこで私も子ども同士の交流がここで切れてしまわないように、「みなさん、特産物を教えてね。」という書き込みをした。これにはいろんな学校からたくさん返事があり、どの学校にも校区内に自慢できるものがあることがわかった。これがきっかけで、これまで自分たちのPRばかりに目がいって、他の地域の情報を知ろうとしなかった自分たちに気づき、中華街の近くにあるという神奈川県元街小学校、チューリップが有名という富山県出町小学校に、それぞれどんな地域にある学校なのかと4人がアプローチをかけた。また、ちょうど時を同じくして、北陸地区で参加している学校の先生方のオフライン作戦会議が開かれたため、御陵の玉ねぎを持参し、それぞれの学校にプレゼントすることができた。

プレゼントした翌日、さっそく出町小学校のTさんが「御陵の玉ねぎはすごく大きい。」と、玉ねぎの画像も添えて書き込んでくれた(図1)。4人は、他の学校の子が自分たちの自慢したいものを宣伝してくれたことに驚きとうれしさを隠しきれない様子であった。自慢というのはなにも自分たちでなくてもできたのである。

(4) スタッフのみなさんの心温まる励まし

子どもたちが自信を持ってPR活動ができるようになったのは、スタッフのみなさんからの励ましも大きかった。北陸会議の時にプレゼントした御陵の玉ねぎと淡路島のおみやげ(オニオンスープ)を並べた画像を添付して、御陵の玉ねぎと淡路島とのつながりを紹介して下さったり、「玉ねぎからこんなものができるよ」と、玉ねぎ染めを紹介して下さったスタッフもいた。ちょうど児童会主催の「御陵っ子祭り」でどうやって玉ねぎをPRしようかと考えていた子どもたちは、これらを参考にして、祭りの当日、玉ねぎスープやみそ汁をつくったり、玉ねぎ染めの作品を並べて紹介することができた(図2)。

(5) 思いもよらぬ方向で自慢は続いた!

11月は御陵の玉ねぎ苗植の時期である。(図3)農家の方のご好意で、春の収穫、秋の苗植体験もさせてもらったとき、学校でも植えてみませんか、300本近くの苗をいただいた。300本の苗を植えるには学校の畑だけでは植えきれないこともあり、みんなで相談して「子どもの広場」で紹介することにした。学級委員でもあったS君が「御陵の玉ねぎを植えてみませんか。」という書き込みをした。この書き込みに富山県出町小学校、石川県扇台小学校、神奈川県飯田北小学校の3校から「育ててみたい!」と手が挙がり、それぞれに50本から100本の玉ねぎを送ることになった。「届きましたよ!」といううれしそうな表情の写真付きの書き込みや、「ホームページなどで観察日記をアップしていきますよ!」という書き込みに子どもたちは大変喜んでいて。これらは、今後もこの交流を続けていこうねというメッセージにも受けとれ、これまで実現できなかった他校との交流が実を結び私自身大変うれしかった。

4人はこれを機会にして上手に御陵の玉ねぎを自慢するようになっていった。出町小学校のKさんの「おいしい玉

ねぎができるといいな。」との書き込みに、本校のK君が「大きくておいしい玉ねぎができるよ。長年、御陵の玉ねぎを作っている人からもらった苗だから。」などと、自慢げに返事を書いている。不安なKさんに対して、何度も食しているK君の返事は自信に満ちたものであった。

(6) 出町小学校からチューリップの球根が届いた！

玉ねぎの苗をプレゼントしたあと、出町小学校からびっくりするようなお知らせが届いた。「チューリップの球根はいりませんか？」というのである。本校は、花壇の活動に力を入れていることもあり、子どもたちはすぐにとびついた。本場砺波から届くチューリップの球根に子どもたちの期待は膨らんだ。これで御陵の自慢の玉ねぎが富山の出町小学校で植えられ、出町小学校自慢のチューリップが御陵小学校で植えられることになった。この予想もなかった学校間交流が実現したのは、この広場で子どもたち一人ひとりがいろんな交流を深めていったからにほかならない。6年生では、いただいた球根を卒業記念に役立てようと、今学級会を開き、近くの社会福祉施設や6年間お世話になったところに鉢植えやプランターに植えてプレゼントしようと考えている。これらの活動は、いつまでも心に残る交流活動として、忘れられないものとなるだろう。

3. まとめ 活動を振り返って

今年度の6年生の総合的な学習の中で「子どもの広場」をおおいに活用させてもらった。自分たちの地域で生産されている玉ねぎは全国的には有名ではないけれど、子どもたちにとっては地域の自慢の一品である。「子どもの広場」は自信のなかった子どもたちに自信と勇気を与えてくれた。他の学校の子から「大きいね。」「おいしそう。」など書き込みをいただいたことが、何よりも自慢になった。そして、他の地域で御陵の玉ねぎを植えて育てることになり、思いも寄らないPRになったこと、出町小学校からチューリップの球根が届いて、お互いに自慢の品を交換して育てることになったことも、これからもっと交流が広がりを見せるであろうと、期待を感じさせるものである。

4人のメンバーは、誰も目を向けなくなっていた教室のPCを交流の窓口として目ざめさせてくれた。スタッフをはじめたくさんの仲間に助けをもらいながら、自分の個性を上手に表現し、積極的に活動できるようになったことも大変うれしい。ただ、4人ではどうしても「ふるさと自慢」のコーナーでの書き込みが中心となり、他の部屋に書き込んでもっと新しい交流を展開することは難しい。現在4人の活動を見て、11人の子がこの広場への新規参加を希望しているので、この11人には新コンピュータールームの完成と同時にIDを発行し、興味を持った部屋に積極的に参加させたいと思っている。今後15人でどのような交流を広げてくれるのか、また、一人ひとりがこの活動を通してどんな成長を見せてくれるのか、今から楽しみである。



図1 御陵の玉ねぎはすごく大きい！



図2 玉ねぎのPR



図3 玉ねぎの苗植体験